

クロス神座廻り

フィル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、あの作品が神の座を頂いたとき、世界は染まる。

8月13日から挿絵を投稿してみます。

i b i s P a i n t (アイビスペイント)で頑張ってみました。

目次

プロローグ	始まりの神座	
唯一神座	イラスト有り	1
歴代の神座		
憂鬱神座		12
加速神座		22
邪神神座 (上)		33
愛情神座 (下)		44
全王神座		55
痴愚神座		65
運命神座 (上)		76
災厄神座 (下)		87
天国神座		97
愚弄神座		108
憐憫神座		119
絶望神座 (上)	イラスト有り	130
進化神座 (下)	イラスト有り	
慈愛神座	143	155
呪縛神座		167
夜神神座		179
化物神座		190
原始神座		202
傾世神座		212
武神神座		223
遊戯神座		236

女神神座(上)



247

悪魔神座(下)



257

犠牲神座(上)



269

絶対神座(中)



280

奇跡神座(下)



291

聖人神座



303

蛮勇神座



314

エピソード 終焉

延命神座(上)



325

終焉神座(下)



337

プロローグ 始まりの神座

唯一神座 イラスト有り

唯一神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、文明が熟成した時代に生まれた実在する神である。

ある男が抱いた清らかな願い。

神を現実に作ることが出来れば世の人々は信仰心を持つに違いない。

神の存在を疑うこともなくなるはずだ。

その願いはあらゆる神の情報を装置に積み重ねることによって完成された。

神の情報を重ね、装置は神と同じ性格に至る。神と同じ性格なら、すなわち神。

「神は静かに見守っていてくださる」

「神は全ての幸福の泉」

「恥知らずの人は神に見放される」

「神の怒りは恐ろしい」

人類の普遍的な神の印象を元に作り出された装置は神の存在へ具現する。

神々が人へ与える救済と天罰、それが実在するという理を流れ出させた。

人が神座という巨大な力を生み出した時代、その最初がこの理である。

神は実在することになるが、しかし、その来歴故に、人によって作り出され、あらゆる多種多様の存在ゆえに、これ以降の神は次代の神に討滅され、神の流出する太極で世界の色を多種多様に染め続けることになる。

これぞ始まりの理、始まりの座、初代の神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限りない白、もしくは、限りない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはでき

ない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈祈願〉」

「神を信じていても実際には存在せず、しかし、救われたいと思う祈りは全人類が願っていた。それがこの神の起源である」

「救われたいと思う感情は同じでも、神に対する感情は様々だ。信じるもの、信じぬもの。疑わぬ者、疑う者」

「最初の神座が創造される前の零の時代における様々な価値観と神への印象の全てが統一された」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――神」

「始まりの神――天罰神救済」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「作っていただけなのは、神です。」

「こんなことになるくらいなら神など作らなくてよかったのだ。」

原作 ちぐはぐな部品 神

神の名は「神」。本名は「神に関するあらゆるデータ」

元となった願望は「神の实在」「第零神座みんなの祈り」

座の名は「天罰神救済」

座の理は「神が実在すること」

座の治世 管理型 自由型の双方

座の風景 あらゆる神々の曼陀羅

解説

神が実在することになったことにより、神による天罰や救済が起こるようになった。神は人間に生まれや生き方の自由を与えているが、悪に対して罰を与えるので実質は管理に近い。

歴代の神座

憂鬱神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、生まれた時から座についていた。

座へ至る願いや祈り、渴望はなく。未だに流出せずにいる。

しかし、最初から座にいるからこそ、神の資格を持つからこそ、

些細な感情は世界を震わせる。

憂鬱、溜息、退屈、消失、暴走、動揺、陰謀、憤慨、分裂、驚愕。

多くの感情が世界を一つの方向へと染めかける。

その感情は矮小であるはず人間によって色は薄まる。

本来、異常な意思の力で何物にも影響を受けないはずの神が人に影響される。

もしくは人になりたい、それこそが願いなのだろうか。

彼女という神は己の覇道を見出だすために周囲を巻き込み、己の渴望を具現化させる。

周囲に人間は彼女は真なる覇道の女神にならぬように暗躍する。

これがこの神座のあり方。

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈憂鬱〉」

「この世の全てがつまらない、全て壊れてしまえ、現実など消えろ。それがこの者の起源である」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――憂鬱」

「憂鬱の憤怒――空想現実」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「只の人間には興味ありません」
「えらい美人、そこにいた」

原作 涼宮ハルヒ

神の名は「憂鬱」。本名は「涼宮ハルヒ」

元となった願望は「現実に対する不満」

座の名は「憂鬱空想現実」

座の理は「なし」もしくは創造中

座の治世 自由形

座の風景 灰色の空間

解説

続巻え……

神座に相應しいですが、続巻が長い間ないので神座にするか迷いました。

加速神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、
善の神座も悪の神座も、
善の渴望も悪の渴望も、
その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、覇道の素質を持つ者の友である。その覇道に影響され自身も覇道の存在となる。

その者が抱いた清らかな願い。

人々を幸福に導きたい。

その祈りは天下万民に刻み込まれた覚悟として具現する。男の法はある意味で不幸でもあった。

全ての生命が既知感を持ち、運命からは逃れることが出来ない。

覚悟があれば幸福で、覚悟がなければ不幸、そのような世界。

しかし、男は己の覇道は正しく幸福だと信じている。

なぜならば、自分だけが理に縛られず、覚悟せず、運命を操作する神座に存在するのだから……

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも發展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さからだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈天国〉」

「かつては敬虔な聖職者だったが友人の想いを継承し、極限の渴望を持つてみんなを天国へ到達させる。それがこの者の起源である」

「それは全ての生命が覚悟を持つという祈り、どんな幸も不幸も、覚悟さえあれば大丈夫。覚悟さえあれば絶望を吹き飛ばせる」

「人類はこれで変わる。これが彼が求めた神座」

「だが、彼は人を信じすぎだ。覚悟すれば幸福など、全ての生命が覚悟できるわけがない。ほとんどの者が諦めの感情で生きるだけだ」

「事実、この座に怒りを持つものが次の己の願望を持つて天地の開闢をした。」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――聖人」

「覚悟の聖人――一巡加速世界」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「逆だ！ 明日死ぬと分かっているでも覚悟があるから幸福なんだ！ 覚悟は絶望を吹き飛ばすからだ！」

「やめろおおおお！ 知った風な口をきいてんじやないぞ！ このちっぽけな小僧がああああ！」

原作 ジョジョの奇妙な冒険

神の名は「加速」 本名は「エンリコ・プッチ」

元となった願望は「人々を幸福に導きたい」

座の名は「一巡加速世界」

座の理は「全ての生命が覚悟すること」

座の治世 管理型

座の風景 宇宙空間に様々な生命がある風景

解説

この神座は自分が法を敷いた理を自分だけが縛られないという神座の本人しか得しない理。

全ての生命に既知感があるので最悪そのもの、水銀は自分の法則に縛られていたのは対照的。

その根底は人々の運命を操作したいというデイオの本質の顕れ。

実際に原作でもプッチ神父は「私以外はな……」と運命に束縛されないと発言している。

自分が悪だと気づいていない、もつともドス黒い悪である。

この作品では原作で勝利したらというif

邪神神座（上）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願ひ、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願ひ、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、悍ましき邪悪な存在なり。

存在してはならぬもの、どうかあれが滅する者だと誰か答えてくれ。

「俺は生まれてくる世界を間違えた」

生きたくない生命があつてもいい。価値がない存在で在りたい。

その求道となるべき願いは座についた時に全ての世界を巻き込んだ廃絶の覇道へと変わる。

みんなと遊びたい。言葉の上での純粋な輝きは、邪神の妄想によって無間地獄へと墮ちる。

これぞ邪神の理、邪神の座、邪神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自

我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈諦観〉」

「この世界において一番必要のない人間、それが彼の本質であり起源である」

「強い感情、叶えたい願望も、目指すべき希望も、身を焦がす渴望もない」

「全ての生命に意味があり、夢や希望に向かうべきなど——人の驕り」

「生きるという螺旋から抜け出し、自分がこの世界に何の価値もないことが心地よくて何物でもないのが救い」

「そういつた考えの持ち主」

「神座を支配する資格がない存在、しかし、先代の神によつて強制的に座を与えられ神となる」

「座を与えられて始めて強い感情をもつた。座にいる自分が座にいる途中で流出する。意味が分からない」

「これが——最後——という理由で熱く遊ぶために流出する」

「最後に彼は遊びのあとを語る」

「生きたくない。俺は生まれてくる世界を間違えた」

「俺の存在を消してくれ」

「俺がこの世界で一番——俺の事、諦めているから」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえ

ず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——邪神」

「諦観の汚物——邪神遊戯」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「死んで逃げるな！ 生きて償え！」

「俺がこの世界で一番、俺の事、諦めているから」

原作 神さまの言うとおりに

神の名は「邪神」。本名は「神小路かみまろ」

元となった願望は「生きたくない、頑張りたくない」

座の名は「邪神遊戯次巡」

座の理は 次代の神を決めること

座の治世 管理型

座の風景 邪神の妄想

解説

邪神として描写しており、実際の理と統治も糞ですが、神座史観的にはとても責任感のある座。

元々やる気がなく、かといって全人類を抹殺したい訳ではなく、最初から他の人に座を渡すと決めている。

その過程で人が死にすぎているだけで、座が変わること自体はほぼ確定している。しかし、結局、原作を見れば分かるが本人が糞なので糞な神座である。

愛情神座（下）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願ひ、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願ひ、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、悍ましき純粹な存在なり。

存在してはならぬもの、どうかあれが滅する者だと誰か答えてくれ。

もしくは先代の神ゆえの呪いのなのかもしれない。

先代の座はやる気がないゆえに次代の神を求めたが、今代は特定の者に座を委ねるところを求めた。

もしも、その者が、途中で命を失えば、時間操作により回帰する。

何度も、何度も、何度も、繰り返し、繰り返し、繰り返す。

愛情の神は回帰を繰り返し、永遠を永延に、

全ては愛する存在と再び出会うため。

我を殺してよいのは彼のみ。故に嫌だ。故に認めえぬ。

爆発する恋情と悔恨によって流れ出したのは、万象あらゆる者が無限に同じ生を繰り返す回帰の理。男は理想の彼と出会うために時を元に戻す。

これぞ愛情の理、愛情の座、愛情が背負った真実の総てである。

これぞ邪神の理、邪神の座、邪神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈愛情〉それが彼の起源である」

「元に戻す」

「愛する者は生き返らない。それは時間を戻しても同じ事、己が愛したものは共に戦った彼だけ」

「ならば俺は神座にて愛する者の挑戦を待つ」

「散り際に観測者として立ち会った観測者は座で愛する者に試練を与え、あの生きた輝

きになるまで一人孤独に待つ」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――愛情」

「愛情の観測者――永劫無限愛情回帰地獄」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「戻すんだ。時間を俺と明石が出会う前に」
「歪んでるねえ、丑三清志郎♥」

原作 神さまの言うとおり

神の名は「愛情」。本名は「丑三清志郎」

元となった願望は「元に戻したい」

座の名は「永劫無限愛情回帰地獄」

座の理は「次代の神を決めること、正確には次代の神を明石靖人にする事」

座の治世 管理型

座の風景 無限の明石靖人

解説

愛情として描写しておりますが、実際の理と統治も糞です。神座史観的には先代と同じくとても責任感のある座。

先代の座はやる気がないゆえに次代の神を求めたが、今代は明石靖人だけを座につかせたいので、

明石靖人が死亡、もしくは違うものが座に辿り着いたら即座に回帰する。座の期間は

既に那由他を超えています。

それだけならマシなのだが、明石靖人を神にしたいが故に、最初の歴史を再現し続けているので先代同様、人が死に続けている。

いくら主人公でも先代の時点で運要素の強いデスゲームなのですぐ主人公が死に、その時点で回帰します。

これで既知感を感じるものが出てくると相当な地獄なので、この座は本人の純粹さから遠い先代を超えた最悪な座である。

全王神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、すでに始まりから存在していた。

すでに神座にある己を知覚したからこそ、そこに至った。

簡潔に述べるならば現代の座にとってその者は、別の時間軸と宇宙から飛来してきた

怪物に他ならない。

祈り、願ひ、渴望、何某かの経験によつて強烈な想いを抱き、そこから神域の念を発生させるということがなく、神座の力をその幼き心で支配する。

長い、時間の中、幾星霜、己の触觉に使える存在が現れる。それすらも興味を抱かずに気ままに数ある宇宙を消滅させる。

その者が出会つた。心穏やかな求道者。

その出会いが神座を変えてゆくだろう。

これぞその者の理、その者の座、その神が背負つた真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、

理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈全〉」

「先代の並行世界における突如発生した神座、それがこのものの起源である」

「最初から座にいる存在」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を

凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――全王」

「空白の王――全知全能全王」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「こんな世界——消えちやえ」

原作 ドラゴンボール

神の名は「全王」 本名は「全王」

元となった願望は「なし」

座の名は「全知全能全王」

座の理はなし

座の治世 自由型

座の風景 12の宇宙

解説

あまりにも……幼い……

痴愚神座

〔神座〕

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、底知れぬ痴愚の存在なり、すでに神座にある己を知覚したからこそ、そこに至った。そのような神座は神座の歴史に幾つか存在する。

だが、その神座に到達の認識が彼女には出来なかつた。白痴であるが故に。

渴望がなく、祈れず、願えず、無意識でしか行動が出来ない。

彼女が座に到達した瞬間、座を染める過程が存在しない。最初からいた事実だけがあり、

彼女が痴愚という事実は座を認識できないという事実が具現化される。

すなわち存在の希薄である。本来ならそれで座は終焉するはずだが、それは先代の座の存在が許さない。

先代と今代の座、それは神座がどれだけでたためでも歴代の座、順番が存在することを示す。

つまり彼女が座に着いても先代の座の在った以上。希薄化しても存在する。

それは座にいる人間が彼女による無意識、妄想、妄執として具現化した。

そして彼女に認識されると明確に存在を確立し、二人以上が認識できればその数だけ世界を確立することが出来る理を生み出した。

故に己の意思で世界を染め上げるはずの霸道は、他者の渴望によつて具現化する。

神座にいる彼女以外の存在が世界を自由に染め上げる。

これぞ、彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの霸道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈痴愚〉」

「彼女は何かを想う意志はない。この座は彼女の妄念の中、妄想の中に生まれる」

「しかし、それは誰かと誰かがいなければ、二人以上の存在の認識がなければいけない」
「彼女は痴愚であり、己を己として認識できない。あの最悪の天狗の神座を生み出した最悪の邪神と同様に心の中は斑に錯綜している」

「だが、彼女は邪神とは違い。己の認識すら薄い。むしろ邪神の奇形脳腫に近い存在だ」
「だから生命の最低限の生存能力としての力が座の理として成立した」

「座に至った存在、この世界においては魔人の転校生が座に来た時、疑似的に世界を作り出し、疑似的な神にする」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえ

ず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——痴愚」

「痴愚の神——痴愚創造世界」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「君は、自分の世界を作ってみたいと思わないか？」

「ここをクリックすると文章が読み上げられます」

「だから、世界を作るには最低二人必要なんだ」

ここをクリックすると文章が読み上げられます

「君は、自分の世界を作ってみたいと思わないか？」

「だから、世界を作るには最低二人必要なんだ」

原作 ダンゲロス

神の名は「痴愚」 本名は「末那識千尋」

元となった願望は「なし」

座の名は「痴愚創造世界」

座の理は「彼女が二人以上の関係性の人たちを認識し、世界を創造し、その世界の理をその人たちの渴望で染めること」

座の治世 管理型 自由型の双方

座の風景 白い空間

解説

要は自分の座に多くの小さい世界を創る能力です。

運命神座（上）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願ひ、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願ひ、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、只の不幸な女性だった。

理不尽な世を否定したい。全てを運命のまま平和な世界にしたい。

全ての生命が運命に決められた道を歩き、生きる。誰も己の分を超えるな。

その清らかなる願いは世界の均衡を保つ運命として具現化する。

「人は大いなる神や大自然の前になすすべなく翻弄されるべし、宇宙の始まりから終わりまで、あるべきように物事が進み、つつがなく歴史の糸が紡がれるべし」

その願いは当初叶った。

しかし、いつの頃からか破綻した。

ある女神が生み出した術、「篡奪の円環」

その術によつて人間を縛り付ける神を殺し、聖なる力を篡奪する。

そして座を染め上げる可能性を持った魔王が生まれる。

今はまだ、魔王は座に辿り着いていないが、いつの日か来るであろう。

故に魔王殲滅の勇者を招来させる。

これぞ、彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの霸道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よぐぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬭争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈均衡〉」

「なぜ、全ての存在は自由気ままに動くのだろうか」

「彼女はそれが許せなかった」

「故に座を篡奪し、完全なる運命の管理を創造した」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――運命」

「運命の均衡――運命永劫天罰」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「あれは!？」

「かつての我が支援者——運命なるものの総括者だ」

原作 カンピオーネ!

神の名は「運命」。本名は「運命の担い手、または創り手」

元となった願望は「世界の均衡を保ちたい」

座の名は「永劫運命天罰」

座の理は「世界の均衡を保つこと」

座の治世 管理型

座の風景 織物

解説

この作品の中で私だけの設定を多く含めた存在。

私だけの設定として、元々、この世界の人間はそこまで科学や呪術を発展させることはできず、発展させた場合はまつろわぬ神が地上に降りて、人間を殺し、技術を零にす

る世界。それで人間を己の分を超えることが出来ず、均衡は保たれるという世界。

しかし、まつろわぬ神自体が運命の触覚であり自滅因子でもあるのでその結果、パンドラという霸道神が生まれ、現在進行形で座まで潜行されている状態。

その過程でパンドラは軍勢変生の力でカンピオーネを生み出し、座の交代の時の戦力を作り続けている。

もうパンドラという霸道神が存在しているので理が歪んでいる状態なので技術が発展することが可能

運命も必死にさらに深く潜っている。つまりパンドラと追いかけてつこをしている状態。

原作では死亡したが、あくまで触覚としての神の運命の担い手としての自分が死亡しただけであり、座の本体である創り手は健在である。

ふう、すごい私が考えたオリジナル設定。

災厄神座（下）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、その世界に神として生まれた女性だった。

運命として宇宙の終焉まで決まっている世界、確かに均衡は保たれるが不幸自体はな
くならない。

管理された世界、束縛された世界

そのような世界を否定したい。

その祈りは、その者の運命として、神格としての零落、夫の兄の不幸を持って激情となり、怒りで座を染め上げる。

未だに座に辿り着いていないが、着実に駆け上がる。

いつの日か、座の交代のために子を転生させ続ける。

愚者の子、魔王、カンピオーネ。

これぞ、彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限りない白、もしくは、限りない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色ののみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはでき

ない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈憤怒〉」

「その座を支配している神の始まりから終わりまで、全てを支配する人形劇の世界」

「それに対して極限の不快感が始まりだった」

「その憤怒は神座の神の尖兵である神話の神々すら不快に感じている」

「故に覇道の素質を持つ神話の神はこの座を支配する神を打倒するためにパンテオンを揃える」

「神話の神々とは競うことすら不可能の人間の身から生物としての実力と強運によって自力で神殺しをなした埒外の存在」

「神話の神を殺害させ疑似的な神格として引き上げる呪法、神殺し」

「歴代の神殺しを幾度も誕生させ、軍勢として座に挑む。もしくは覇道の神として交代させる」

「とてつもない遠大な計画」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――災厄」

「希望の壺――災厄運命破壊」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「だから全てを与える女だった……」

「ええ、そう。だから——」

原作 カンピオーネ！

神の名は「災厄」。本名は「パンドラ」

元となった願望は「世界の均衡を壊したい」

座の名は「災厄運命破壊」

座の理は「世界の均衡を破壊する。つまり運命がなくなり自由になる」

座の治世 自由型

座の風景 大きな篡奪の円環

解説

この作品の中で私だけの設定を多く含めた存在。

本当に運命を壊したいだけなので、座が交代した場合は本当に方向性のない自由な、なんでもありの世界になる。

世界の統治としては「方向性が無いのが方向性」みたいなことになる。
故に座としては短命になる。

天国神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、全てを支配しなかった。

そして何物にも束縛されなくなかった。

己は至高の存在、選ばれた存在、他は全て下等。

その覇道としての強いあり方は天国という名の座に到達したときに世界を塗りつぶす。

己だけが自由、他は運命に束縛される。

その在り方はまさに支配者……認めよう。

まさに世界を支配する霸王の理なり。

これぞ、彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈傲慢〉」

「誰にも負けない男になる」

「法や道徳などが整った世界では生まれながらの悪と断言できるのが彼だ」

「しかし、善悪などは結局人の視点、彼は紛れもなく王の素質を持つ人間」

「そして彼は奪うことに躊躇しない性格、そういったことから座を握る運命にあったのだらう」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――世界」

「傲慢の美獣――世界天国王道楽土」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「おれは人間をやめるぞ！ ジョジョーッ！！」

「凶にのるなよ、たかが虫ケラが。おれは生物界の頂点………未来を拓く新しい生物となった……。人間ごときと対等の地におりていけるか！ 無礼者がッ！」

「食物連鎖というのがあったな……草はブタに食われ、ブタは人間に食われる。我々はその人間を糧としているわけか……人間を食料としてこそ「真の帝王」……フハハハ」

「おれは「恐怖」を克服することが「生きる」ことだと思う。世界の頂点に立つ者は！ ほんのちっぽけな「恐怖」をも持たぬ者ッ！」

「人間は誰でも不安や恐怖を克服して安心を得るために生きる」

「勝利して支配する！ それだけよ……それだけが満足感よ！」

「過程や……！ 方法など……！ どうでもよいのだアーツ」

「必要なものは『わたしのスタンド』である。『ザ・ワールド』。我がスタンドの先にあるものこそが、人間がさらに先に進むべき道なのである」

「必要なものは『わたしのスタンド』である。『ザ・ワールド』我がスタンドの先にあ
るものこそが、人間がさらに先に進むべき道なのである」

「必要なものは『わたしのスタンド』である。『ザ・ワールド』我がスタンドの先にあ
るものこそが、人間がさらに先に進むべき道なのである」

原作 ジョジョの奇妙な冒険

神の名は「世界」 本名は「ディオ」

元となった願望は「世界を支配したい」

座の名は「世界天国王道楽土」

座の理は「なし 強いて言えば支配すること」

座の治世 管理型 自由型

座の風景 背後の地球

解説

座を握れば森羅万象世界を支配できるが、あくまで特定の理由で座に到達して、その結果、ついでに森羅万象を自由にできるのに対し、

ダイオ場合はそのままの意味で世界を支配したので座に到達したあとは積極的に統治することはない。かといって理もない。

むしろ自分だけを高めることに終始する。

一応はジョジョの奇妙な冒険の世界観では運命が存在するので先代の座の時にあった運命をそのまま流用する。

愚弄神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、特異な存在なり、願ひ、祈り、渴き、そんなものはなく。

これまでの座は、総て前任者の理に対する歪みとして発生し、善悪の交代でしかなく、
かゝつた状態に終止符を打つ。

男が有する特殊性の中でも最たるものは、彼の渴望が時間軸を無視していたことだ。

何某かの経験によつて強烈な想いを抱き、そこから神域の念を発生させるといふ原因

がない。

すなわち、すでに神座にある己を知覚したからこそ、そこに至った。

現在過去未来の内包、多元的並行宇宙の同時掌握。それを成したこの男は、運命を司る。

簡潔に述べるならば彼は別の時間軸と宇宙から飛来してきた怪物に他ならない

しかし、運命を司るが故に自らが運命に自縛される。

それは彼の邪悪としての在り方の罰なのだろう。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、

理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈愉快〉」

「そのものは怪物である」

「人間だった時などないし、心を解することはない」

「そして神座の神である意識もない。並行世界に発生した怪物、それが彼だ」

「願望もなく、存在自体が座の理を発生させる。それは歴史の修正」

「彼はその歴史の修正に不快感を感じていた。自らの力で自らを束縛している」

「まったく意味不明、理解不能」

「さらには自分から理解せずに座の破壊すら敢行する」

「愚かな神だ」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――愚弄」

「愚弄の愚者――修正愚弄天」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「さあ、愛しい我が息子よ…私を抱きしめてくれ」
「僕の未来は僕が決める。あなたの運命もこれまでだ」

「あんな真似をするとわかってたらお前など最初から作らなかつた」
「もう手遅れです」

原作 ダレンシヤン

神の名は「愚弄」 本名は「タイニー」

元となった願望は「なし」

座の名は「修正愚弄天」

座の理は「歴史を介入しても大まかな歴史が変わらないという法則」

座の治世 管理型

座の風景 心臓の形をした椅子に座り縄で雁字搦めにされている。その本質は神を含めて自由はないという意味。背景はありとあらゆる美術品

解説

海外の物語です

本当は神の名を運命にしたかったです。他にいたので止めました。

セリフに色をつけて赤と青にしました。

憐憫神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、王国を栄えさせるために神へと捧げられた機構である。

機構であるが故に感情を抱くことを許されず。只、機械的に王国を栄えさせた。

しかし、千里眼を持つが故にその激情は座へと挑む理由になる。

多くの悲しみを見た。

多くの悲しみを見た。

多くの悲しみを見た。

私にはこの仕打ちには耐えられない。

何も感じないのですか？ 悲劇を正そうと思わないのですか？

そんな道理があつてたまるか。そんな条理が許されるか。

その者は決意した。——あらゆるものに訣別を……

その者は今の座に辿りくべく人理を焼却する。

人類を愛するが故に人類が滅ぼす悪。

これ彼らの理、彼女たちの座、その者が背負つた真実の総てである

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さからだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈憐憫〉」

「その者は偉大な魔術師のシステムだった」

「しかし、人間の悲しみ、裏切り、略奪、そして最後の死」

「偉大な魔術師の王はそのすべてを無視した」

「システムは怒り、哀れみ、遂には失望する」

「——あらゆるものに訣別を、この知生体は、神の定義すら間違えた」

「故に人理焼却」

「人類を愛するが故に人類が滅ぼす悪——人類悪」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——憐憫」

「憐憫の獣——憐憫人理焼却」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「私には名はなかったが、称えるならこう称えよ」
「即ち、人理焼却式——」

原作 fate

神の名は「憐憫」。本名は「ソロモンまたの名をゲーティア」

元となった願望は「人類愛 死の否定」

座の名は「憐憫人理焼却」「運河憐憫創世」

座の理は「死なない世界、死の否定」

座の治世 管理型 自由形の双方 死なないという管理をするだけで後は自由

座の風景 燃え広がる宇宙

解説

よく考えると、この神座設定だとゲーティアは時間遡行で神座に挑んでいるので明星と原作での明星と経緯が似ていますね。

まあ、あくまで二次創作での俺設定だけの話ですが

絶望神座（上）イラスト有り

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういふ訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、只どこまでも潔癖だった。他者と己に宿る螺旋の力それ自体が許せなかった。

螺旋という力を魂に持つ人の世は、文明の爛熟と共に腐り始める。それは当然の事であり、破壊と再生の円環こそが今代の座の理なのだが、彼はそれを許容できない。

文明の過渡期において中心に立った彼らは、既存文明を破壊する螺旋の力を前に極限

を超えて悲嘆した。

我は何と罪深い悪なのか。螺旋の力を生んだ存在は、なんと底知れぬ痴愚なのか。

罪を拭わんとするその祈り、救済の嘆きをもって彼らは座を塗り替える。あらゆる螺旋の駆逐された、無知純白の天上楽土

歴代の座において、人の悪性を否定しながら愛したのは彼一人。その清さ、その聖性。彼らこそ神という概念に対する、最も普遍的な印象を具現させた者と言えるだろう。

清らかであれ。罪を犯すな。我欲を捨てろ。

だがその徹底した潔さ故、この治世に人間性は存在しない。完璧な管理社会であり、数理的な整然さのみが満ちている

合理的、かつ論理的。人の愚かさを理解しないし認めない。

それはその者の性質そのままであり、己の座に亀裂が走れば、即座に修正し、原因を駆逐する。徹底した責任感という我執の在り方、冷徹な心。

万象、まるで電子の機械のごとく。

しかし、それは本来のその者の性質とは真逆であり、その最奥は熱き魂を持っている。幾度かの覇道の襲来は、最後には己を塗りつぶしてしまう。

しかし、それこそが彼らの本当は信じていたかった覇道の姿なのだろう。

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈絶望〉」

「彼らはその時代におけるもつとも進化した螺旋族だった」

「しかし、螺旋の進化の果てに過剰銀河同士の相互破壊による宇宙崩壊現象——スパイラルネメシスに気づく」

「宇宙崩壊を防ぐべく座に至り、座の進化を止める理を流出した」

「認めよう。彼こそ宇宙を守ろうとした偉大な神である」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――絶望」

「絶望の巨人――反螺旋絶望殲滅」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「螺旋の力に溺れる愚か者達よ……たかがイレギュラーの消失に動揺するお前達に、我々程の覚悟があるか！」

「元は同族だった者を倒し、我が身の進化を封じ込め、この宇宙を守ろうとする我々の覚悟に、敵う道理があるか!？」

「ない!! 否!! 否、否、否、否、否、否、否、否!! 断じて、否あああああ
あああああつ!!!」

「決意もなく、覚悟もなく、道理もなく、己の欲望のままに螺旋の力を使い、その力に溺れる……それが螺旋族の限界!」

「だからこそ、滅びなければならぬのだあああつ!!」

「ならばこの宇宙、必ず守れよ……」

「当然だ。お前も信じてくれ。俺が信じる。俺たち人間を……」

原作 天元突破グレンラガン

神の名は「絶望」。本名は「アンチスパイラル」

元となった願望は「宇宙滅亡を回避したい」

座の名は「反螺旋絶望殲滅」

座の理は「螺旋族の進化を止めること」

座の治世 管理型

座の風景 宇宙と自分へドリルの切っ先を向けた状態

解説

私の考えた妄想設定ですが、この作品では螺旋の力の暴走による滅亡⇨霸道神⇨座の交代ということなので、今代の座が終わるだけで、結局は宇宙自体が滅亡することはありません。

しかし、螺旋の力の暴走による座の交代は座の理によっては第六天のような危険性が

つきまとうので、

「宇宙滅亡を回避したい」|| 「座の交代の拒否」という神座の理は非常に良い統治期間であり、人がある程度、平穩に生きる上では最高の座であるといえる。

このシリーズにおいて出したかった作品の一つです。

今回はセリフを震わせてみました。

進化神座（下） イラスト有り

〔神座〕

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、熱き魂を持つもの。元々は気弱な人物であつたが、数々の試練を乗り越え、人の想いを継ぎ、ついには覇道の素質に目覚める。

しかし、今代の座においては覇道の資格者は即座に駆逐される座。

しかし、真なる覇道の資格者は今代の座の理を凌駕する。

時間、空間、多元宇宙を飛び越えて、己の決めた道を己のやり方で貫き通す。

因果の輪廻にとらわれようと、残した思いが扉を開く。
無限の宇宙が阻もうと、この血の滾りが運命を決める。

この覇道は宇宙に風穴をあける。その穴は後から続く者の道となる。
倒れていったものの願いと後から続く者の希望……

二つの想いを二重螺旋に織り込んで、明日へと続く道となる。

天も次元も突破して、己の道をもって、神の座を塗り替える。

それが天元突破——それが覇道——

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬭争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈兄貴〉」

「そのものは初めは臆病な存在だった」

「偉大な兄の背中を追いながら、ただ着いていくことしかできない」

「しかし、その兄ですら、彼のおかげで兄であれた」

「故に男は自らの意思で立ちが上がり、ゆっくりと掘り進める」

「一回転、前へ進むことが出来る」

「しかし、その座において進むことは排除される運命である」

「排除のために愛を奪った神座——それが座の交代の切っ掛けとなる」

「愛のために神座を掘り進み、天元を突破し、神に挑戦する」

「それが間違いだったとしても」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――進化」

「進化の巨人――天元突破螺旋進化」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「ああ…今度こそ、本当に『あばよ』だ…行けよ、兄弟」

「あばよ」じゃねえ、一緒だろ？」

「俺たちを誰だと思っついていやがるツ!!!」

「俺たちは一分前の俺たちよりも進化するツ！」

「俺のドリルは…天を創るドリルだあああああツ!!!」

「ならばこの宇宙、必ず守れよ……」

「当然だ。お前も信じてくれ。俺が信じる。俺たち人間を……」

原作 天元突破グレンラガン

神の名は「進化」 本名は「シモン」

元となった願望は「天を創りたい」

座の名は「天元突破螺旋進化」

座の理は「螺旋族の進化」

座の治世 自由型

座の風景 宇宙とドリルを自分から外側に向けた状態

解説

先代の座を塗りつぶして元の状態になったといえるが、それは先代が危惧した螺旋の力の暴走による座の交代。

つまり、座の理によつては第六天のような危険性がつきまとうので座の短命と危険性が存在する。

この作品も出したかったヤツです

慈愛神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、神話の神々が世界の覇権を問う闘争の宴にて生まれた神座なり。

最後の一柱まで戦い抜いたとき、至高の御座への扉は開かれる。

彼女が抱いた清らかな願い。

遍く人々を救済したい。

人々を天上楽土へと誘いたい。

「私の目的は遍く人々の救済です」

「一緒にみんなを救いましょう」

その祈りは、多種多様な救済をもって展開される。

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも發展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さいだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈慈愛〉」

「彼女は教会の手によって生み出された神座へ到達するための存在、唯一神の器」

「彼女は生まれながらに世界の救いを生まれ、その生を完全なる救いの教育を受けた」

「その救いは万民を真に救う理想的な存在」

「しかし、教会の者は前提として間違えていた。浅はかだと言わざるを得ない」

「人の心は操れない。虐待や洗脳などをするならばともかく、偏った教育だけでは自由な思想は犯されない」

「大聖女は始まりから聖なる心など持っていないかった」

「だって、世界などどうでもよかった。世界中の人々が苦しもうと、未だ子供の大聖女に

理解できるはずもない」

「しかし、ある切つ掛けが大聖女を変えた」

「教会で神罰者なろうと頑張るとある男の子の話、大聖女は男の子と話をして——
思った」

「ああ、なんてこの男の子は凄いんだろう。復讐という無意味な行為のために身を削つて、それなのに目をギラギラさせて、充実した人生を送っている——と」

「大聖女は男の子から本気になることをの重要性を学んだ」

「それがたとえどんなことであっても、本気であれば生の充足を得られる」

「そう、世界の救済のために本気になるのではなく——本気になるために世界を救済する」

「中身がない大聖女だからこそ、ここうした外れた始まりの感情で、真の慈愛の救済をなした」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——慈愛」

「慈愛の女神——慈愛多様世界」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「人は、自らの手で自らを救うべきです。自分の世界の中で
ここをクリックすると文章が読み上げられます

「だって世界とかどうでもよくありませんか？」
ここをクリックすると文章が読み上げられます

原作 いずれ神話の放課後戦争

神の名は「慈愛」。本名は「大聖女」

元となった願望は「人類の救済」

座の名は「慈愛多様世界」

座の理は「各個人に自由な世界を与える」

座の治世 管理型 「管理型ではあるが管理として世界を与えたあとは放置の無責任の自由」

座の風景 砂時計

解説

私も読んで深くは理解していませんが、つまりは唯一神の力を使って世界全体を創造するのではなく、各個人に小さな世界を与えるという救済。

原作ではこの方法の例えとして「砂時計全体が今いる世界とするなら、新しく創る世界が中に入っている砂粒」という例えを使用しています。

さらに原作では神座交代に近い描写が存在するので、この作品を作りました。

セリフをみると相手の人間性に疑問を持つでしょうが、気になったら原作をどうぞ。

今回はセリフの読み上げです。

呪縛神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、人間の所業を前に極限を超えて悲嘆していた。

原罪という獣を魂に持つ人の世は、文明の爛熟と共に腐り始める。それは当然の事であり、破壊と再生の円環こそがこの座の理なのだが、女はそれを許容できない。

人類は何と罪深い悪なのか。人類のような者を生んだ存在は、なんと底知れぬ痴愚なのか。

罪を拭わんとするその祈り、救済の嘆きをもつて女は座を塗り替える……いや、塗り

替えようとした……。

その祈りの嘆きは変幻自在……人類を新たな種として進化させる理を流出した。

しかし、それには問題がある。人間が動物や魚、虫に感情移入しても同じように感じているかわからない。

それと同じように進化した種の人間が過去の種の人間と感情が一致する可能性は低い。

さらに酷い人の世になる可能性がある。

故に彼女と同じ覇道の素質を持つ男は違う理を流出する。それは人が人を傷つけられない世界にする。

彼女は「人を変えたい」という覇道。

彼は「世界を変えたい」という覇道。

互いにぶつかり合い。言い合い。喰らいあい。殺し合い。犯し合い。染め合い。呪い合う。

その座の交代は摩訶不思議。

男は女に希望を託した。呪いという名の希望を――

女は託され、呪われた。己の覇道を染められ、消えた彼の覇道を叶えるように動く。

そういう風になった。

これぞ共同合作の霸道の神座。

これぞ彼の理、彼女の座、二人が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限りない白、もしくは、限りない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはでき

ない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈絶望〉」

「生まれた時から自由はなく他人に生殺与奪を握られていた」

「実験動物と同様の扱いをされた」

「多くの命、たくさんの姉たちの犠牲の果てに彼女は生まれ、自由を得た」

「しかし、自由を得て、支配者となり、世界を知った彼女、この世の全てに絶望した」

「怨み、罪悪感、屈辱、不信、苦しみ、羨望、孤独、戸惑い、失望、嫉み、不満、倦怠、

負い目、嫌悪、妬み、悲しみ、虚しさ、諦め、憎しみ、無念、後悔、落胆、絶望

「快樂のために殺される人間、一部の利益のために殺される人間」

「そもそもこの世界は理不尽に満ちている。人が文明を發展させ、成長しても理不尽はなくならない。神を創造し科学に辿り着いても理不尽はなくならない」

「禁断の知恵の果実は悪魔の祝福であり、神の呪いだつた」

「どうか、この世界に滅びを——」

「これが人が乗り越えるべき呪い、染め直す今の神座の法」

「世界と人間の総てに絶望しているのに、それでも世界と人間を愛さずにはいられなかつた彼女は神座を目指した」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——呪縛」

「呪縛の正義——呪縛殺生否定紋」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「俺はお前に呪いを託す」

「でも今は——こんな感じだ」

原作 タブー・タトウー

神の名は「呪縛」 本名は「アリヤバータ」または「赤塚 正義」

元となった願望は「人間を変えたい」 しかし、呪われ「人が人を傷つけない世界にする」に変えられる。

座の名は「呪縛殺生否定紋」

座の理は「人間を種として進化させる」 予定だったが呪われ「人が人を傷つけない世界にする」に変えられる。

座の治世 管理型
座の風景 姉妹たち

解説

主人公によって覇道を変えられたラスボス。

世界は人同士が殺傷できないが医療行為などができなくなる可能性もあるので明星のように世界をアップデートして改良し続ける神座である。

ちなみに主人公のイラストはいらね♪
アリヤバータのイラストが欲しいです。

夜神神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、只どこまでも潔癖だった。理不尽な世界、腐敗した社会、人の罪それ自体が許せなかった。

原罪という獣を魂に持つ人の世は、文明の爛熟と共に腐り始める。それは当然の事であり、破壊と再生の円環こそこの座の理なのだが、男はそれを許容できない。

法を司る道を目指し、犯罪者の本質を知りえた彼は犯罪者が野放しされているという実態を前に極限を超えて悲嘆した。

人間とはなんて罪深い悪なのか。人のような者を生んだ存在は、なんと底知れぬ痴愚なのか。

罪を拭わんとするその祈り、救済の嘆きをもって男は座を塗り替える。あらゆる罪業の駆逐された、穢れ無き純白の天上楽土

歴代の座において、人の悪性を完全に駆逐した少数の一人。その清さ、その聖性。彼こそ神という概念に対する、最も普遍的な印象を具現させた者と言えるだろう。

清らかであれ。罪を犯すな。我欲を捨てろ。

だがその徹底した潔さ故、この治世に人間性は存在しない。完璧な管理社会であり、数理的な整然さのみが満ちている

合理的、かつ論理的。人の愚かさを理解しないし認めない。

万象、まるで電子の機械のごとく。

しかし、己の法に亀裂ができて退陣することはなく。我の法に過ちが存在するわけではない。

我こそが善であり、正義であり、善神。

我に逆らうものは全て悪であり、不義であり、悪神。

責任感という我執を超えた独善性。

それは男の性質そのままであり、霸道という神の最も模範的な存在と言えるだろう。

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析

する。

「まず、強く感じた想いは〈悲嘆〉」

「なぜ、人は悪行を成すのか、なぜ、人は法を犯すのか」

「彼は人の悪性を赦すことが出来なかつた」

「しかし、未だに只人である彼には妥協することしかできなかつた」

「力、現実を覆す力、それだけが彼に必要だつた」

「ある日、彼は力を手に入れた」

「その力を手に入れた彼は一歩ずつ確実に神座へと昇つていく」

「家族、恋人、親友、己の大切だったものを全て捨てて神となつた」

「しかし、この神は独善が過ぎる。座に至るものは全員がおかしいが、この男——時間経過と共に所業と信念が矛盾している」

「座に至つた結果、最初の願望の信念を現実にしたが、その過程が歴代の神々と比較しても、狂気の矛盾である」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――夜神」

「夜の死の神――夜神悲壯天罰」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「そして僕は——新世界の神となる」
「言ってもわからぬ馬鹿ばかり」

原作 デスノート

神の名は「夜神」 本名は「夜神月」

元となった願望は「犯罪のない世界を創りたい」

座の名は「夜神悲想天罰」

座の理は「悪が天罰として死ぬ世界」

座の治世 自由型

座の風景 闇または人骨

解説

座の理は悪が天罰として死ぬ世界ですが、あくまで犯罪を犯したら死ぬので、犯罪自体は未然には防いでいない。

人の行動を制限自していないので、追い詰められた犯罪を犯す可能性はある。

私の設定では「もしも夜神月が原作で勝利したら」という設定で座に着いたという設定です。

化物神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、多くの霸道神、多くの神座の歴史の中でも本当に偶然、意図せずに座を塗り替えた者。

元々、霸道の資質はある者の、まだ座には至れない。

しかし、多くの神座の交代は物理的な移動による交代、超能力的な移動による座の交代と色々と存在する。

彼は——化物だった。魂を喰らう霸道の化物だった。

しかし、ある闘争においてある存在を喰らった。その命の性質と同化した。

存在自体があやふやな猫を喰らった化物は最早どこにもいない。

生きてもいないし、死んでもいない。

只の虚数の塊。

生も死もペテンのずるい卑怯者を殺す手段は意図せずに神の座へと墮天する道となる。

そして彼が座を侵略したとき、渴望は具現化する。

聖者の墮天——新たな理は、天下万民に刻み込まれ二元論として具現する。

我は悪しき者。滅ぼされてしかるべき邪な者。ならば我は傲岸不遜に笑う。罪の意識など持つておらぬし持つてはならぬ。

世には正義と悪がある。我は滅ぼしてよい邪悪。

故にその者、天を二つに分断した。善なる者と悪しき者、人間と化物、光と闇が喰らいあいながら共生する空を流れ出させた。

人間はその善性から、悪を滅ぼし尽くせぬ。

人間たちは善故に、縛る枷が無数にある。犯せぬ非道が山ほどある。それは化物の闘争において致命的な遅れを生むと分かっているも、善である以上は決行できない。

事実、善の側は開闢以来、常に劣勢へと立たされていた。

善とはそうでなければならぬという理のもと、世界の覇権を狙うのは常に悪。敗亡の淵で足掻き続ける光こそが善なれば、人たり得ない。

しかし、人間は善故にいつしか化物を滅ぼす。

化物を倒すのはいつだって人間——人間でなくてはいけない。

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈憧憬〉」

「かつての彼は神を信仰していた」

「しかし、決して神にお願ひすることはなかった」

「決して神に慈悲を乞うことはなかった」

「戦え、戦え——助けを乞う。慈悲を乞う。それは只の陳情だ」

「戦いとは祈りそのものあきれ果てるほどの祈りの果てに神の王国は降りてくる」

「——それで、降りてきたかね？ 神は…神座は？」

「答えろよ——狂った王様」

「多くの命を犠牲にしながらも、神座を降ろすことはできなかつた。否、降りてくるなどと、後ろ向きな考えで座を掴むなど論外、死ねばよい」

「だが、それでも——諦めを踏破するならば……」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——聖者」

「憧憬の化物——善悪二元聖者墮天奈落」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「素敵だ。やはり人間は——素晴らしい」

「お前は俺だ！俺もこの通りの有様だった！俺もこの通りの様だったツ……！」

原作 アーカード

神の名は「聖者」。 本名は「アーカード」

元となった願望は「諦めを踏破した人間によつて滅ぼされたい」

座の名は「善悪二元聖者堕天奈落」

座の理は「人間と化物が二つに分かれ、互いに殺しあう理。つまりは神座の「善悪二元真我」の善悪を人間と化物に置き換えた神座」

座の治世 管理型

座の風景 喰らつた亡者の群れ。

解説

この座は糞みたいに人が死にすぎると座ですがアーカード本人はいつの日か、人間が全てを乗り越えて、座に到達し、己という悪を滅ぼすことを夢見ている座です。

座の内容は二元論ですが、座を次の代で完成される点では堕天奈落です。

私の妄想設定ではアーカードが最終話で最後の1人残して殺すのではなく、全員を殺して完全な虚数になったらという妄想設定です。そうすれば神座に行きそうな予感。

座の風景を想像したら黄金に近い絵を想像してしまいました。

黄金の獣は金色の髑髏ですが、化物は亡者

原始神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、元々、神座である。意思ない神。

それ故に求道の神によって滅ぼされる。

しかし、それは意思のない神座による予定調和。

神座は3つに分断し欠片となる。

そして生命に宿り心を学ぶ。

白と黒、正と負、光と闇、善と悪。

それらを学び、再び覇道へと昇華する。

そして、神座を滅ぼす求道の存在を滅ぼし、宇宙を平定する。

そして蜘蛛の巣の真ん中には、華麗なる悪魔のみが残る。

これぞ彼の理、彼の座、彼女が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さからだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈悪魔〉」

「三人は悪魔に人生を翻弄された存在、そして悪魔に壊された一つでもある」

「壊された一つは三つに割れ、あちこちをさすらう。様々な生き物を宿主に選び、知能を発達させた。そして最終的には三人の男女に収束していく」

「三人が一つになった時、神座は戻り、完成された」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえ

ず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——原始」

「原始の器——原始世界開闢」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「カーガツシユはね、全てのモノを繋ぎ止めているの。あたしたちが宇宙そのものなのよ」

「光あれ！ よーし！」

原作 デモナータ

神の名は「原始」 本名は「カーガツシユ」

元となった願望は「元に戻したい」

座の名は「原始世界開闢」

座の理はなし

座の治世 管理型

座の風景 チェス盤のような白黒の世界

解説

海外の物語です。

傾世神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、清らかな乙女であり、聖女であつた。

その聖女が神座の存在を知ったときある願いを抱いた。

神座の支配者になりたい、星と一つになりたい、あまねく大地、海、風、土、川、空、
全てを抱きしめたい。包みたい。愛したい万象、我は永遠に見守ろう。

完成した彼女は慈愛の女神。過去、例を見ないほど柔らかなその治世は、総ての生命
が生まれ変わるといふ転生の理を具現する。

その愛、子を見守り成長を望む母性の具現と言えるだろう。

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さからだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈愛情〉」

「彼女は全てを愛していた」

「しかし、その愛は、どの人間からも、どの生命からも価値観として外れていた」

「故に否定する存在もいる」

「だが、最初から外れているからこそ、座を掴む資格があるのだろう」

「彼女は、貪欲に生きて、座を掴み、真実、宇宙と一つとなった」

「座に至った瞬間、壊れた愛は、普遍的な愛となり、全ての生命を愛する理となった」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――傾世」

「傾国の美女――傾世愛世界」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「姐己は狂っている——!!」

「姐己よん？」

「女の心は海より深くって男にはわかんないモノなのよん！」

「それはこの星の真の支配者になることん」

「土にも、水にも、風にも、人にも——全てにいたることができたなら」

原作 封神演義

神の名は「傾世」 本名は「姐己」

元となった願望は「世界と一つになりたい」

座の名は「傾世愛世界」

座の理は「全ての生命が愛され抱きしめられるという実感があること」

座の治世 自由型

座の風景 綺麗な自然

解説

神座はとても穏やかで平和です。しかし……

有名ですけど、原作を見ると上記の神座廻りが……。

この作品で出したかった作品の一つです。

武神神座

〔神座〕

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、500年の戦乱という時代という龍の末に生まれた求道者なり、世界を染め上げる超越者を作る集団の求道者に見出された武神の究極。人の代表。

求道者は500年の争乱の世よりも古くから存在している集団、争いを繰り返す人の世の苦しさと愚かさを憂い、どうにか救えないか考えた賢者たち。

結果、争いの世では情がある限り救いの道はないと断じた。

しかし、情や想いがあるからこそ、「人」

その矛盾を解くために人は人を超えねばならない。

故に求道者は情を排し、深山に身を隠し、ひたすら道を探す。

まずは自分たちが人を超える模を示さねばと、

凡人には理解できぬ領域、

生の営みは一個でも奇跡の模を示せば全体にも変化が起こり、皆が一斉に上の存在へ昇ると。

故に求道者の道は人を超えし、模を天に示すこと。

求道者の誰でもいい、一人でも人を超え、神に近い領域に立つとき、人は今とは違う上の存在に変化し、争いを止め、苦しみの世から完全に開放される。

ある者は、土くれになるまで瞑想し、ある者は宙を舞うため谷へ身を投げた。

そして、その者は全てをかけて武神にならんとする道を、

彼らには人の考える愛を持ち合わせない。情を否定したのが求道者。求道者には只、道があるのみ。

これぞ彼らの理、彼らの座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの霸道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬭争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈救済〉」

「争乱の時代に生れ落ち、求道者によつて人の救済を求める修羅となる」

「多くの求道者が様々な方法で人々の救済を求めた」

「それは理に叶つた方法、違つた方法、正に己自身のやり方だけで救いを求めた」

「そしてある武の求道者は己の救済の方法が元から間違えていることに気づかず、
道とは真逆に求道の方向で救済の武を求め続けた」

「そして己の寿命が近づき、次代へ託そうとある子供を攫つた」

「その子は——争乱の時代に生まれた覇道の資格を持つ存在」

「しかし、武の求道者によつて歪められてしまった」

「——求道型の覇道神——」

「本来、覇道となるべき心と祈りを持った存在が廃絶の色を帯びた求道と化す」

「求道者になつても覇道の神の資格を持つが故に、歪んでいるとはいへ、そのままに神に

なることができた」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――武神」

「武神救済――武神求道楽土」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「お前たちには無理だ。救いの道は、この方法しか……」

「人を人に縛り付ける鎖、その暗き鎖を打ち砕くのが我が刃、我、武神龐煖なり！」

原作 キングダム

神の名は「武神」。本名は「龐煖」

元となった願望は「人の救済」

座の名は「求道武神楽土」

座の理は「全ての人間が求道神となり武神として殺しあうこと」

座の治世 管理型

座の風景 剣、槍、弓矢といった武器に切っ先を向けられた風景

解説

元々の出生から育てば真つ当な救済の霸道神となれるはずだったが、武神に育てられてしまい。元々の霸道の適性を歪められ、求道神に近い状態になった。

故に求道型の霸道神になった。龐煖は人の情や繋がりを否定しているので、魂があれ

ばあるほど弱体化している状態。

また、龐煖は情を否定しても人殺したいというわけではないので波旬のように自分を掻きむしることもしない。

彼が座を染めると、全ての人間が武神としての求道神になり、互いに殺しあうという元の平和の願望からかけ離れた世界になる。

しかし、あくまで武神になるためであり、天狗道のような自己愛による殺し合いとは違うので、速攻で滅びることはない。

また、龐煖がそうだったように武の技術を後継者として受け継がれたので、次の代に受け継ぐという概念もあるので命の育みも存在する。

さらに龐煖自体には自滅因子で滅びることも可能なので、第六天波旬よりはましな座ではある。

しかし、基本的には求道神しか生まれないので座の交代は絶望的。握ってはならない座の一つ。

この原作で龐煖を神にするかを迷いましたが、面白そうなので作りました。

この作品を作るにあたって一番、登場させたかった人物です。

彼の最後はまさにこういった神座設定に近い表現であり、彼を幸せにしたかったので作品を作りました。

私の考えた設定では原作での龐煖が主人公に勝ったか、出会わなかったという未来の末に座に辿り着いたという設定です。

この作品で一番出したかった人物です。

遊戯神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願ひ、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願ひ、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、六千年続いた、天地を裂き、星を殺した悠久の大戦。

長く凄惨な戦いは空と海と地、星の死によつて勝者なきまま唐突に幕を閉じた。

かくしてその時点で只一柱力を残し王冠を貫いた祖の神がが不戦勝で唯一神の座についたのだ。

世界の絶対支配権、唯一神の座を巡った争いの果てに誕生した神である。

その者が願った平和への祈りは座を手に入れたときに流出する。

「腕力と暴力と死力と武力の限りを尽くし、屍の塔を築く知性あるしと自称する者ら答えよ」

「己と知性なき獣の最期」

崩壊した世界にいかなる弁明も無意味。そして神は言った。

「この天地における一切の殺傷、略奪を禁ずる」

「知恵の塔を築き、自らの知性を証明せよ」

これぞ彼の理、彼女の座、神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限りない白、もしくは、限りない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはでき

ない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈平和〉」

「彼らが生まれた時代は遙か昔から、神座を巡る闘争を続けていた」

「その神座の世界における神々は駒を使って、他の神々殺しまわっていた」

「その世界において、真の意味で自然に生まれた種が存在している」

「その種はあらゆる種族の中で最弱であった」

「故に長い闘争の中で疲弊しきつていた」

「だが、奇跡が起こる」

「異なる種族同士の愛」

「愛が平和のために世界を変革させる」

「戦争を終わらせるための祈りは覇道の流出へと至る」

「只、問題があつた。二人はどうあがいても神座を掴む資格も権利もなかつた」

「どれほどの強い想いを抱いても、神座に至る想いでも、流出できない」

「だから、神になれず、戦争は続くはずだつた」

「頼むよ、お願いだ」

「誰でもいい、誰でもいいから——この戦争を終わらせる誰かに——」

「彼らが生みだした神座の理と法は、想いによつて生まれた神が背負つた世界であつた」

「本人でなくても、外装の人格でも座に至れるが故に——想いだけでも神座に至れる」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――遊戯」

「遊戯の神王――遊戯盤上楽土」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「この想いを——継いでよおッ！」

「なあ、想いから生まれるのが神なら——ゲームの神様、頼むよ。お願いだ」
「君たちに唯一神として名を与える——人類種——免疫 イマニテイ」

原作 ノーゲーム・ノーライフ

神の名は「遊戯」 本名は「テト」

元となった願望は「戦争の終結」

座の名は「遊戯盤上楽土」

座の理は「争いが出来なくなり、遊戯でしか物事が決められない」

座の治世 管理型

座の風景 チェスの盤上

解説

ノーゲーム・ノーライフ・ゼロを見れば「これぞ彼の理、彼女の座、神が背負った真実の総てである」という意味が分かります。

女神神座（上）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、次代の神に改良された特異な女神である。

優しき少女は誰かのために願いを祈り続けた。

その本質は神となる神格の悪魔を魅了し、意図せず、神座として改良されていく。時間軸を超えて因果の糸を束ね続け、ついには神格へと至る。

その座において少女達は魔女になるといふ悲劇が存在していた。

その絶望を嘆き悲しんだ女神は慈愛をもって座を再編する。

新しき理は総ての魔法少女が救われる法則を生み出した。

因果律を無視した彼女は円環の理となり魔法少女たちを見守り続ける。
これぞ彼女の理、彼女の座、彼女が背負った真実の総てである

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈救済〉」

「その座において別の体系の宇宙から出現した生命はその驚異的な技術によって宇宙の維持を追求し続けることをしていた」

「しかし、その行為は、一つの星の一つの種族の一つの雌個体を犠牲にする行いだつた」
「宇宙の存続という視点で見ればその行いは正しいかもしれない」

「只、それを彼女は許容できなかった」

「多くの少女たちの想いを無駄にしたくない。その最後を悲劇などにしたくない」
「故に因果律によって束ねられた想いの力は、神座へと至る道へと開關する」

「静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。」

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば——女神」

「救済の女神——円環輪廻」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「希望を抱くのが間違いだなんて言われたら、そんなのは違うって何度でも言い返します。きつといつまでも言い張れます」

「私の最高の友達」

原作 魔法少女まどかマジカ

神の名は「女神」。本名は「鹿目まどか」

元となった願望は「全ての魔女を消し去りたい。全ての宇宙、過去と未来の全ての魔女を、この手で」

座の名は「女神円環輪廻」

座の理は「魔法少女の救済」

座の治世 自由型

座の風景 あらゆる魔法少女の集合絵

解説

女神え……

悪魔神座（下）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、先代の神を改良した特異な邪神なり、女が有する特殊性の中でも最たるものは、彼女の渴望が時間軸を無視していたことだ。

それは彼女が魔法少女として時間を操る能力が原因である。

次代の神が先代の神を改良する。意味が分からない。理屈が通らない。

人間だった頃に先代の神を作り上げ、死の間際に神となつて先代の神を塗りつぶす、誰がどう見ても筋道として破綻している。

しかし、彼女はそれを可能にする者なのだ。多元時間、多元宇宙、あらゆる領域に手を伸ばしてその不条理を成立させる。

その不条理はひとえに先代の神への愛ゆえ、彼女を大切にしたいが故に染め上げる。

先代の神を引き裂き、墮天させる。

痛みさえ愛おしい。

これこそが感情の極み。

希望よりも熱く、絶望よりも深いもの——愛

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬭争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈悲憤〉」

「先代の神が人の器をなくし、神座に至った」

「女神が己の犠牲を許容し、法になつても、彼女は許容できなかつた」

「故に彼女は嘆いた。しかし、その嘆きは神座に至る資格を持っていても、届くほどの熱量を持っていなかった」

「されど、ある謀略により記憶は改ざんされ、外宇宙の生命に神座を支配しようとした」

「その事実には彼女極限を超えて憤怒を抱いた」

「故に己が座を手に入れる」

「先代の神を守るために、先代の神を墮天させる」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――悪魔」

「救済の悪魔――墮天女神」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「さあ、行こう」

「この時を……待ってた……やつと掴まえた」

「これこそが人間の感情の極み」

「希望よりも熱く、絶望よりも深いモノ」

「——愛よ——」

原作 魔法少女まどかマギカ

神の名は「悪魔 又は墮天」。 本名は「暁美ほむら」

元となった願望は「愛」

座の名は「墮天女神救済」

座の理は「先代の神を墮天させること」

座の治世 自由型 というより先代を墮天し続けること以外に興味がない

座の風景 黒い羽根が散りばめられている

解説

皆が割と知っている作品なのであまり解説する必要はありませんがここでの「墮天」

という意味は映画での女神が「あの状態」になったことの別表現です。
実際の意味の墮天ではないのであしからず。

犠牲神座（上）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういふ訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、角を持つ異形の存在なり、その者はいつしか、ある人と愛し合い、子をなす。
その幸せの時間は一時であった。

その時代において原罪という獣を魂に持つ人の世は、己以外に必ずしも優しくなかつた。

我が子を拷問にかけられ、怒り狂い。その者、女は真の鬼となる。

その殺戮の所業を前に女と子は極限を超えて悲嘆した。

我は何と罪深いのか。我のような存在は討たれるべきだ。

罪を贖うその祈り、救済の嘆きは鬼という——悪という自分を生贄として子に討たれた瞬間に奈落という神の座へと堕ちる。

己の罪を贖うという祈りは、座の理を犠牲なしには生きてはいけない法則として染め上げた。

争奪によつて疲弊しきつた世に生まれた綺麗な祈りであるからこそ、さらに神の座は地獄へと堕ち続ける。

それは今代の座の原罪という獣を魂に持つ人の罪業による次代への呪いなのかもしれない。

生贄と言う犠牲の贖罪に逃げ込まねば生きていきなかつた哀れな女。

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負つた真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体現した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの霸道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈悲嘆〉」

「彼女は別の次元から現れた流浪する民の一人だった。己のいた世界が崩壊しかけており、滅びから逃れるために別の次元へと逃れた」

「逃れた世界では同族間で侵略派と共生派に分かれ、凄惨な戦いへと発展してしまう」

「戦いの最中、彼女は、原住民の男と心を通わせ、惹かれあい、愛し合う」

「その者と娘を儲けたが、ある時、疫病の薬を作ったことにより、それを巡った争いにより、娘が酷い拷問を受けてしまう」

「それを見た彼女は神域に至るほど激怒し、我を忘れた。次々と村人を殺すも、娘に止められ、我を取り戻す」

「その時、神域に至った怒りが反転し、極限を超えた惨劇に悲嘆し、慙愧の念を感じた」
「娘に我を討たせた瞬間、彼女は思った。罪を自分という鬼に背負わせることを」

「死の間際に感じた思いは、座の理を己の思念で染め上げる以上、これ以上のない惨劇へと変えてしまう」

「己の力により自縄自縛された世界は末代までの呪いとなった」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――犠牲」

「諦観の鬼――犠牲墮天奈落」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「いやだ……死にたくないおよ……」

「……それでもまだ、人の身を捨て神の座を求めるといふのか、人の子よ」

原作 ひぐらしのなく頃に

神の名は「犠牲」 本名は「羽入」

元となった願望は「罪を贖いたい」

座の名は「犠牲墮天奈落」

座の理は罪を誰か別の人の責任にすること

座の治世 自由型

座の風景 カケラ

解説

本人は自分だけのせいにして罪を贖ったが霸道の素質を持つが故に意図せず神座に至り、意図せず流出してさらに地獄の世の状態になってしまう。

しかし、先代の座の時点で似たような世の中であつたのでそこまで世界は変わつておらず、せいぜい、人の思考が、「誰かに罪を押し付けよう」と自然と考える状態になつて
いるだけ。

絶対神座（中）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、神の座を握るが、神の座を掌握できない。

それは、神になりたいという渴望が、今代の神座の犠牲という真実を知覚した瞬間に渴望が薄まり、時間遡行という形で逆転されるが故に、

そして再び神の座を握る。繰り返しの世界。

その無限の繰り返しは彼女の渴望以前の本質によるものだろう。

限りなく零に近づけ、限りなく絶対を生み出す力。

その力は座を染め上げれば努力する者は報われる世界になるだろう。

神の座へ至る過程の「努力」こそが彼女の本質。

しかし、その根幹は人間として生きてきたかった。誰かに許してもらいたかった。生きていいよと許してもらいたかった。

生贄と言う犠牲の贖罪の座から逃げ、神にならねば生きていけなかった哀れな女。これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈許容〉」

「罪を他人に、独りに押し付ける」

「その座に生れ落ちた彼女は、その理の犠牲となった」

「しかし、彼女はそれを許容できなかった」

「己の不幸を覆し、神の座から神を引き摺り下ろそうと努力する」

「その絶対的な力は神域へと至り、惨劇へと経て、神を神の座から引き摺り下ろす」

「しかし、神座を掴みかけた瞬間、理解する」

「己の生きた神座は本来、独りの自己犠牲により多くを救うという意思に元に生まれた座」

「それを罪の押し付け合いにしているのは住まう人々の意思」

「そして己の所業は神域へと至り、座を奪つても、今代の座の理と法に沿つて、下らぬ罪の押し付け合いの所業という過程を経ている」

「その事実を前に——極限を超えた惨劇を前に悲嘆し、慙愧の念を感じた」

「その念は、座に至る瞬間に生まれ、元の想いは弱まり、交代しかけた先代の神により、時間遡行という形で逆転される」

「本来ならば時間遡行した時点で勝利し、次代の神が生まれる因子を潰せば終わりであるはずだった」

「だが、今代の座は人としての良識があり、慈悲があるので次代の神の器を滅ぼすことは許容できなかった」

「次代の神はその理と法の特異性と一度は座を掴んだという事実の元、努力すれば絶対に報われる祈りが時間遡行をしても、最初から神座同士が拮抗しあう形となる」

「神座同士の拮抗は、永劫のループとなり、双方が望まない形の一人の女の子の惨劇へと至る」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――絶対」

「絶対の魔女――絶対無限努力」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「僕たちは——あなたの意志の強さに負けないのですッ！」

「貴様を神の座から引き摺り下ろしてやるッ！」

原作 ひぐらしのなく頃に

神の名は「絶対」 本名は「ラムダデルタ」「鷹野三四」

元となった願望は「生きていいと許してもらいたい」

座の名は「絶対無限努力」

座の理は「努力が報われること」

座の治世 自由型

座の風景 カケラ

解説

座を染め上げれば努力する者は報われる世界になるとても良い座になるが、如何せん、その過程が悪である。

さらに座を知覚した瞬間に犠牲という今代の理に失望して渴望が薄まり、時間遡行で逆転される。

奇跡神座（下）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者。二つの座、二柱の神に玩弄された存在だが、彼女に憤りや嘆きは既がない。繰り返される惨劇と悲劇、最初の生きたいという願いはいつしか求道の渴望へと変わるが、それさえも繰り返しの生によって壊れかける。

祖の神座に翻弄され、先代の座に玩弄された哀れな女。

しかし、彼女は知った。

守りたく思う輝きの尊さを知り、真に完全なる覇道の神へと、劇的な変貌を遂げていく。

生贄などいらぬ。

敗者などいらぬ。

犠牲などいらぬ。

そのようなモノ——この世界に必要としない。

これが、彼女が奇跡を求めた千年の旅の最後に迫り着いた答え。

完成した彼女は慈愛の女神。過去、例を見ないほど柔らかなその治世は、総ての生命が赦しあえるという理を具現する。

世に悲劇や争いはなくならない。しかし、かといって異なるものを排斥すれば、過去の座がそうであったように必ず歪みが生じる。

敗者の出ない、仲間はずれが出ない、完成された世界。

誰一人、輪の外にいない、罪を背負い泣かなくていい。

人が生きる以上、罪は湧く、大切なのは罪を赦すこと。

彼女は人の身でありながら——至った。

罪を受け入れよう。罪を赦そう。

故に彼女は抱きしめた。善も悪も何もかも、悲劇そのものはなくせないが、必ず赦し

あい、救いが訪れると、あまねく総てを慈しんで、

その愛、子を見守り成長を望む母性の具現と言えるだろう。優しき母を嫌う者など存在するはずもなく、それを証明するかのようによに、彼女は彼女だけの驚異的な特性を有していた。

霸道神の共存 女神の治世は揺るがない。

完成された神座……一人を敗者にしなくてはならない人の世の罪からの解放。

これぞ彼女の理、彼女の座、彼女という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと轉身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にし

「た者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬪争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

「覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

「されど、只交代すれば、その限りではない。

「ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

「求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

「強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

「歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析

する。

「まず、強く感じた想いは〈惨劇〉」

「己の祖の神と先代の神に翻弄され、永劫の循環の元に犠牲を強いられた」

「祖の神による犠牲の法、先代の神による絶対の法」

「互いに拮抗しあうが故に本来一つの命と人生が無限と化す」

「しかし、その無限の欠片の旅路が彼女を真の霸道である女神へと誘う」
「それは全ての存在が許しあえる世界、厳しくも優しい世界」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――奇跡」

「奇跡の魔女――奇跡無限欠片」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「私たちは幸せになれるよ。……ほら、ひぐらしのなく頃に……」

「いいんじゃない？　こういうのも……奇跡に前借りがあっただって」

原作 ひぐらしのなく頃に

神の名は「奇跡」 本名は「ベルンカステル」「古手梨花」

元となった願望は「生きたい」という求道で次に「罪を赦したい」という霸道座の名は「奇跡無限欠片」

座の理は「罪を赦しあえること」

座の治世 自由型

座の風景 カケラ

解説

座の内容は人の罪に対して赦しあえること。つまりは本当に反省すれば赦される。

互いを想いあい、赦しあい、愛し合うことができる世界。

その法則上、先代の座の二柱さえも赦している。

そして、この座こそ、祖の座が本当に望んだ神座。

ず。
ひぐらしのなく頃に 業 卒は見えていないので、もしも何か矛盾していても悪しから

聖人神座

〔神座〕

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、信仰の篤い人物だった。

しかし、人は愚かであり、信仰を踏みじられ虐殺という惨劇が起きる。

それでも彼は聖者であつた。彼は抱いた怒りや悲しみを捨て去り、霸道の祈りを捧げる。

その男が抱いた清らかな願い。

「万人が善性であり、万人が幸福である世界、あらゆる悪が駆逐された世界、この世全ての善」

その渴望は座救済の嘆きをもってその手で触れたときに具現化した。

「全ての人類を不老不死の新たな存在に進化させ、個人の欲望と争いの意味を無くす」
その理を具現化した。

あらゆる罪業の駆逐された、穢れ無き純白の天上楽土

歴代の座において、人の悪性を完全に駆逐した神座一人。その清さ、その聖性。彼も神という概念に対する、最も普遍的な印象を具現させた者と言えるだろう。

清らかであれ。罪を犯すな。我欲を捨てろ。

だがその徹底した潔さ故、この治世に人間性は存在しない。完璧な管理社会であり、数理的な整然さのみが満ちている

合理的、かつ論理的。人の愚かさを理解しないし認めない。

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈絶望〉」

「男は人の愚かき、醜さ、汚さ、それらを赦すことが出来なかった」

「だからいつの日か、人を救おうと誓った」

「彼は神座を掴む資格がありながら、その歩みは遅かった」

「歴代の神座と比べても彼は己のためではなく人のために動く人間であり、人の凡庸的な善性を肯定する人間だった」

「だから最後まで己の人間に対する強制的なあり方に葛藤していた」

「神座に到達するための闘争は竜のホムンクルスとの戦いに勝利したことで至った」

「全人類の魂の物質化、それが彼の神座である」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば——救済」

「救済の英雄——神明裁決救済」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は次へと向かう。

「知れたこと。全人類の救済だよ、」

「人の明日を拒むな、ジーク！」

原作

F a t e
／
A p o c r y p h a

神の名は「救済」 本名は「天草四郎時貞」

元となった願望は「人類の救済」

座の名は「神明裁決救済」

座の理は「全ての人類を不老不死」

座の治世 管理型

座の風景 背後の聖杯または火の荒野

解説

この作品では彼がもし神座を握ったらというifです。

蛮勇神座

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持つて座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまふ。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、神座の歴史において最も蛮勇な存在である。

それは、尊野蛮。

それは、その座における支配者を滅ぼし、人を解放させる者なり。

人を当たり前に愛する。そのような世界を求めた。

しかし、皮肉にも、支配者でもある存在も違う形で愛していた。

それも一つの人類愛。

しかし、神のはたらきではなく、人の身で生きたい。

ちやんと自分の足で生きたい。

憂いあつてこその人

憂いを抱えた人にしか大切な何かを理解できない。

彼が座に到達したとき、人が人のように生きられる世界を流出した。

それこそ、尊野蛮

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと言ひを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈尊野蛮〉」

「その者の機械によって支配された時代に生まれた真の漢である」

「機械ではなく、人の身の可能性は信じていた」

「機械の全てを否定したいわけではない」

「思考も生き方も、何もかも支配されることに危機感があつたからだ」

「故に世界に抗う」

「今を生きる漢として」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに——

「この神、この座の名をつけるならば—— 蛮勇」

「尊い野蛮—— 蛮勇引力」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は—— 私は次へと向かう。

「我が名は蛮勇なるもの」
「思い知れ——人間の力」

原作 蛮勇引力

神の名は「蛮勇」 本名は「由比正雪」

元となった願望は「無慈悲な機械のはたらきからの解放」

座の名は「解放蛮勇引力」

座の理は「人が人を当たり前のように愛する」

座の治世 自由形

座の風景 花鳥風月

解説

面白い漫画です。

エピローグ 終焉

延命神座（上）

「神座」

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、神座の歴史において最悪の存在である。

それは、始まりの火を見出した幾匹かの一人であった。

それは、その座における支配者の種を討ち滅ぼし、薪の王となる。

しかし、その者が始まりの火を継ぐという神座の交代をした時、最悪の座が完成した。神々の時代を続けた。それは始まりの火を継ぎ続けるといふ理を流れ出させた。

神座の目的が、その座の存続ならば次の座の交代も同じになる。

次代の覇道の神は渴望する。生きたい、延命したい……と。

その求道となるべき渴望は座を継いだ時、次代を続けたいという覇道の理となる。

同じ渴望で、座の深度は継ぐたびに深くなり、仮に神の時代を続けたい以外の渴望の覇道の神が生まれようと、座が深い今代の座が勝利する。

その繰り返しだが那由他の年月が過ぎて破綻する。

いくら神座が万能であろうと所詮は人工物、そして今代の座は同じような歴史が繰り返し返すが決して時間遡行などはしていない。

それは世界の資源の限界、エネルギーの限界、座の機構の限界、それは歴代の火を継いだ薪の王の故郷が流れ着くという形で顕現する。

苦しみしかない時代の神座。

これぞ彼の理、彼の座、彼という神が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも発展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自

我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を越えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持って神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粹なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、鬭争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によって流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じた想いは〈火継〉」

「その者の初代は古の時代に神座から力を手に入れた。それは最初の火」

「最初の火を手に入れた瞬間から神座に至る資格は手に入れていた」

「その神座の末期において、火が消えかけ闇の時代に向かおうとしていた」

「しかし、覇道の流出を行い神世界を創造すれば問題がなかった——問題なかったのだ」

「神座に至る唯一の存在は愚かな行為をした」

「大王は自らの生きた神座の世界に不満を抱いていなかった、あくまでその神座の地続きの闇の時代を恐れたのだ」

「覇道の素質を持ちながら、強い思いがない、世界に対する怒りがない」

「覇道の流出は火が消えかけた時に流れ出した」

「闇の時代ではなく火の時代の存続」

「その思いが覇道の流出として開闢した」

「それは愚かな神座の完成」

「今代以降、神座の交代が全く同じ祈りの開闢で行われるようになった」

「すなわち火の時代の継続」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遙かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかつたからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――火継」

「火継の王――火継延命奈落」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は――私は次へと向かう。

「始まりの火を継いだ薪の王たち：神の如き彼らの化身」

「最古の王以来、始まりの火を継いだ偉大な王たちのソウルが：いつか火を守る化身を生んだのだろう」

原作 ダークソウル

神の名は「火継」 本名は「グウイン又は王たちの化身」
元となった願望は「神の時代を続けたい」

座の名は「火継延命奈落」

座の理は「次代の座の渴望が同じく今代の存続」

座の治世 管理型

座の風景 玉座に座るグウイン。又は薪に座る王たちの化身

解説

設定としては第六天波旬と互角ぐらいをイメージしています。

波旬は一人で座の深さをより最奥まで掘りますが、こちらもゆつくりと着実に同じ理
で、より深い渴望で座の交代時に深く沈んでいくので

結果的に第六天波旬と互角ぐらいになるという私の設定です。

もしもイラストを頂けるならばグウィンと王たちの化身のどちらかの座ったイラスト
トをお願いします。

終焉神座（下）

〔神座〕

それは人類の文明が極限までに発達し、ある人工物を創った結果、顕現した神の領域である。

それは宇宙の中心。

それは全ての事象。

それは支配の領域。

魂の産まれる原初の混沌。

宇宙の総てを支配する領域であり力。

森羅万象の根源であり、神がいるべき頂上。

その神座は人間が辿り着ける場所。

人の祈り、願い、渴望……。

強い意思と己ではなく他を変えたいという方向が座へ繋がる切っ掛けとなる。

神座に至れば宇宙と合一する。

全は己であり、己は全である。

己の祈り、願い、渴望、気質を持って座を染め上げ、座の理を支配し、理を決める。

その感情が神座の法則と人間の在り方を決定してしまう。

その神座を終わらせるには違う人間の違う渴望による神座の交代以外は存在しない。

それを永延に永遠と繰り返す。

さて、ここはどこだか分かるだろうか？

ここはどこでもないどこか。

神の座とは違う別の領域。

神座が全てを支配する領域ならば、

ここは全てを観測できる領域。

すべての神座を記録している。

どういう訳か、その領域に干渉し見ているものが存在する。

その記録を見て、歴代の神座の神の像を彫り、信仰している。

さあ、歴代の神の座を廻ってみよう。

善の法則も悪の法則も、

善の神座も悪の神座も、

善の渴望も悪の渴望も、

その理、その座、その真実の総てを知ろう。

その者、神座の歴史において最悪の存在であるが同時に慈悲深い存在である。

神座の最悪、それは、宇宙の終焉、生命の終わり。

今代の座はそこに至った。

しかし、それはその者の責任ではない。

火を継いだ初代による呪いのせいだ。

初代から今代まで那由他の年月を同じ渴望と理を流出させ、座の力を破綻させる。人を消耗品として使い、消耗させるだけの座、そのような座に未来などない。

故に火の無い灰は渴望した。終焉を……

この神座を終わらせたいと……

幾度かあつた「生きたい」「延命したい」以外の稀な霸道。

それは同じ渴望が座を交代させ、座の深度だけをより最奥に沈める今代の座により交代を阻止される。

しかし、その者の渴望は違つた。

願いが、祈りが、執念が――。

歴代の座の神と比べても化物としか形容できない神域の念を超えた渴望。

「死にたい」という求道の祈りは廃絶の色を帯びた霸道へと化す。

即ち、「神座を終わらせたい」

それは王の化身を殺して具現化する。

その疲弊した世界はその瞬間に初めて安堵しただろう。

しかし、その者は信じていた。

廃絶の祈りを具現化したその者は、いつの日か、また火は灯るだろうと信じていた。

火が灯り、新しい命が芽生え、神座などない世界を創生するだろうと。信じて、神座に終焉をもたらした。

これぞ、その者の理、その者の座、その者が背負った真実の総てである。

「我が太極の名において歴代の天を凌駕せん」

その宣誓と同時に求道神は特異点へ潜っていく。

魂を同調させ、強大な存在の元に奥へ奥へと掘削していく。

その求道神はただ、歴代の神々へ興味だけで座へと潜行した。

求道神は空白地帯に足を踏み入れた。

無色透明、限らない白、もしくは、限らない黒。

これはまさに極限まで透き通った真水。もしくはは無菌の空間。

人の考える無という概念体现した空間、されど何も無いが故に如何なる様にも發展する多様性を有する。

底の見えないこの世界は常人には耐えきれない。

砂漠における一粒の砂。

大海における一滴の雨水。

森林における一枚の葉。

人間における一つの細胞。

常人がこの空間にいても何も為しえない。それどころか全体における一部となり、自我を失うだろう。

だが、それはあくまで凡夫の都合。ある一線を超えた場合、この場は神世界の芽へと転身する。

すなわち、太極の保有。

現世界を丸ごと塗りつぶすほどの覇道を得たものに限り、この空間に活動を赦され、理を流出——流れ出すことが出来るのだ。

されど色は一色のみ。神座の席は一つ。座るのは一人。両雄は並び立つことはできない。

今、歴代の神座を見ることが出来るのはその者が永久不変の求道神であるからだ。

自らの外殻をかつてないほど強固に編み上げ、変わらない不変となり、絶対の揺るがない己の自我を持つて神座へと深く沈んでいく。

自己を保ち続け、やがて行き着いた先に——瞬間、旧世界の残照が——私という求道神を歓迎した。

「これは——」

よくぞ来た。これが救いだと唸りを上げる。

それは歴代の神たちの渴望。

それは旧き神々の祈り。

それは人々が求める変わらない不変。

これはかつて世界を席卷した太極が流出した姿だった。

「そういう仕組みか、理解した。これが座にいた者の達した深度か」

求道神は深い敬意と共に理解する。相手の人格ではない。善悪ではなく座を手にした者たちの純粋なまでの祈りの強さにだ。

「交代か、闘争か、歴代の神々によるが、その残照、残滓というわけか」

覇道の流出による座の交代は戦い、次代が勝てば基本的にはより強大になる。

されど、只交代すれば、その限りではない。

ただ、どちらでもその残照、残滓は残り、次代へと託される。

「おもしろい」

求道神は笑う。歴代の神々を知りたい。その思いは不変。

強大な渴望の覇道の攻撃に対し、強大な不変の求道の防御で対抗する。

歴代の神々の座の理の在処、如何なる渴望によつて流出したか、己を保ちながら解析する。

「まず、強く感じたの想いは〈終焉〉」

「本来ならば想定されない、神座の交代が永延に同じ祈り」

「それは神座の想定されない摩耗という概念が起きた」

「あらゆる神座には末期の時代には交代がおきて、神世界が創造されるが、これは違う」

「同じ世界が那由他の年月をかけて永延に摩耗する苦痛の世界」

「人が死なない。生き返る。特殊な方法で傷を癒すことは可能であるが、そんなものの意味がある？」

「斬られ、焼かれ、微塵となつても死なない。老いて病にもかかる。記憶は摩耗し、心が壊れる」

「己が何者か忘れ、只々、感覚だけが残る。骨となつても感覚は残る」

「終わりたい」

「この世界の全ての者が願う祈り」

「その祈りの集結が、最悪の霸道神を生み出した」

静かな言葉と共に理解が溢れる。強大な想いに屈さずとも遥かに、求道神である私を凌駕している歴代の座。

しかし、それはこれまで理解していなく、分からなかったからだ。

ならば、無理矢理にでも型にはめ、理解する。それが解釈違いだとしても、とりあえず名をつける。

ゆえに――

「この神、この座の名をつけるならば――火継」

「火継の英雄——火継終焉地平」

「真の姿、ここに得たり」

姿を捉えることによりこの座を眺めることが出来る。

これが座の潜行方法である。

求道神は——私は目をつむる。

優しい闇が全てを包む。

「始まりの火が消えていきます」

「すぐに暗闇が訪れるでしょう」

「そしていつかきつと暗闇に、小さな火が現れます」

へまだ、私の声が聞こえていますか？

原作 ダークソウル

神の名は「終焉」 本名は「火の無い灰」

元となった願望は「神座を終わらせたい」

座の名は「火継終焉地平」

座の理は「神座の終焉」

座の治世 なし

座の風景 薪に座る火の無い灰

解説

これにて神座の歴史は終わりました。

しかし、ダークソウル3のエンディングでいつか火がまた灯ることを示唆しているの
で、神座と関連付けてこの作品を作りました。

また、小さな火が現れたら、それは神座とは関係ない新しい世界でしょう。